

哲學研究

第三百十七號

第二十七卷
第八冊

都市國家の成立（承前）

山内得立

五

我々は上に於て都市國家が單なる自然的過程によつてはなく、むしろ人爲的なる——最も適切には歴史的なる過程によつて成立したものであることを第一に、そしてそれを構造する單位が個人ではなく却つて氏族に、または部族にあることを第二に説述しようとした。それらによつて我々の明かにし得たであらうことはしかし如何にして都市が國家となり、都市國家が成立し得たかであり、それとは逆に國家が何故に都市に結びつき、都市國家といふ特殊なる國家形態をなすかといふことではなかつた。我々は第三にこの問題に向はねばならない。近代の國家に於て都市は或は一國の首府として、或は都市集中の傾向からして政治の中軸をなすことは勿論であるが、しかし、都市は依然として一つの都市であつて同時に國家で有り得ない。しかるにギリシアに於ては都市は單なる一つの都市であるのみで

はなく同時に國家であつた。國家は一つの都市を首府とするのではなく、都市自らが國家そのものであつた。ギリシアに於てはギリシアといふ一國があつたわけではなく、有るものはアテナイとかスパルタとかテーベとかコリントスとかいふ多くの諸都市であり、さうしてそれらがそれ／＼に一つの國家をなしてゐたことは有名である。このことは如何にして可能であつたか、またギリシアの國家が何故にかくの如き特殊なる形態をとらねばならなかつたかは別問題として、我々は先づこのことを事實として認め、その性格を理解することに努めよう。

* ギリシアの國家が都市國家であつたか否かについて疑を挟む人がある、殊にウイラモウヰツ・メーレンドルフの如き權威によつてそれがなされてゐることは、我々にとつて由々しき大事であるであらう (Wilamowitz Moellendorf: Staat u. Gesellschaft der Griechen, S. 42)。しかしギリシアに於ては都市が國家の中心をなすのみでなく、國家そのものの本質を規定してゐたことはアリストテレス以來の定説であり、ポーレンツも明晰に論じたやうに、都市國家の本質は都市的なる居住の仕方やその領域によつて定められるのではなく、例へばアテナイの建國に於ての如く市民の多くは地方的に散住してゐても、その協同體的なる中心をアテナイ市に有する限りそれが都市國家たることに於て妨げないのである。(Pollenz: Staatsgedanke und Staatshz der Griechen S. 6 参照)

都市國家がギリシアの國家形態をなすことはギリシアをして單中心的なる (einheitlich) 國家をではなく、複中心的なる (vielheitlich) 國家を形成せしめた。ギリシアにはヘラスといふ一つの國があつたわけではなく、それ／＼の都市を中心とする多くの國々が併存してゐたのである。最も盛時にはかゝる都市國家が、百五十餘も榮えてゐたといふ。しかしそれだけに各々の都市は極めて小規模であつた。コリントは僅かに八八〇平方キロメートルの、シキウオンは三六〇平方キロの領土をしかもつてゐなかつた。エギイナは八五平方キロ、サモスは四六八平方キロ、ナクソスは四

四八平方キロ、有名なるデロスに至つては僅かに五平方キロの大ききかなかつた。スバルタとアテナイとは例外的に大きい、それでも前者はその盛時に於て八四〇〇平方キロ、アテナイはサラミスやオロボス地方をも加へて二六五〇平方キロの面積しかなく、人口もペリクレスの盛時、紀元前四三二年頃に十一萬から十一萬五千人位しかなかつたといはれる (Beloch: Die Bevölkerung der griechisch-römischen Welt, S. 101)。ヘラスの國家は一つの中心から擴大されたものではなく、多くの都市を中心とするそれ／＼に獨立なるポリスから成立つてゐた。勿論これらは互に無關係ではなく、一方にその個別性を明かにすればするほど、他方に相互の密接なる關聯を要求し、むしろ個々國家の形態は間國家的 (Zwischenstaatliche) 關係に於てのみ規定せらるゝわけであるが、都市國家の第一の性格は先づその著しき個別性と多様性とにあるといはねばならぬであらう。かつてアルゴス (Argos) といふ名は單にミケーネに近き一地方の名稱であつたのみでなく、漸次ペロポネソス半島全部を指示し、遂にはヘラス全土を蔽ふ名となつたこともあるが、しかし、それは英雄時代に於てであつて、歴史的時代に於てではなかつた。リーフもいふやうにトロイ遠征のためギリシア各地の英雄がアガメムノンの傘下に集り、彼の居城アルゴスがその中心となつたがためであるにすぎない (Leaf: Homer and history)。歴史的に又は政治的にこれらの諸國が打つて一丸となされ、一つの名によつて呼ばれるやうになつたのはマケドニア王國勃興以後のことであつたと見らるゝ。我々のこゝに論ぜんとするのはいふまでもなく、ホメロス以後、マケドニア以前の都市國家についてであるのである。

パウサニアスが紀元後二世紀頃ギリシアを巡歴したとき、各々の都市はその建設者の名と系譜と生涯の重なる事蹟とを彼に告げることができたといふ。これらの名と事蹟とが彼等市民の記憶から消失し去らなかつたのは、各都市がこれらの英雄によつて建設せられ、死後も亦永久にその都市に止つて之を守護すると考へられたからによる。ケクロプ

スとテセウスとはアテナイの建設者としてその市に祭られた、アブデラ市は *Imestus* を、デロスは *Enius* を、ミレトスは *Zaleus* を、アムパイポリスは *Hagnon* をそれら、神として祭つた。これらは多くその都市の建設者または功勞者であるが、時としてさほどの密接なる關係がなく、むしろ偶然なる機會によつてその市に祭らるるやうになつた人々さへ見出されるのである。アカントスの住民はクセルクセスの屬將であつて、偶々その市に於て病死したアタカイエスを神として祭つたといふ (*Herod.* VII. 117)。この人は英雄でも何でもなく、單に體軀の偉大と、音聲の強大とに於てペルシア人中に雙びなき人であつただけである。クロトナ人は生前その市に於て最も美しかつたといふ理由で死後その人を英雄として崇拜した (*Pausanias* IX. 18) といふ。テセウスの子 *Hippolytus* がトロエゼンに祭られるやうになつたのもその地がテセウスの郷地であるといふよりもヒポリツトスが我母バエドラとの不義の嫌疑から追はれてトロエゼンにのがれ、遂にその海岸に於て馬車から墜死したためであつた。一人の人が或市に祭らるゝのはたゞ人々の異常なイマジネーションを刺戟し、民間の傳承の主人公となるだけの資格を備へさへすれば十分であるやうに見える。その人のたゞならぬ死が人々の注意をひき、その人の怒りが恐れられ、その人の守護が市民によつて要求せらるゝ場合、英雄として崇拜せらるゝに十分であるかのやうに見えるであらう。しかし、それらの理由が何にあるにせよ一たび神としてそこに祭られたときは、常に神話の對象としてではなく、政治的にもその市にとつて淺からぬ意義を有したことは、次の如き例によつても知られるのである。ヘロドトスの傳ふるところによれば (*Herodot.* V. 67) シキウオンの市に *Atestas* を祀つた廟があつた。アドラストスはアルゴスの王であり「テーバイに向ふ七人」の中生き残つた唯一人である。何故に彼がシキウオンに祭られるやうになつたかは恐らく彼の祖父ポリウボスがシキウオンの領主であつたがためであつたであらう。ところが後にクレステネス (アテナイのクレステネスの母方の祖父) がシキ

ウオンの僭主となり、アルゴスと干戈を交へるやうになつてからアルゴス人たるアドラストスが、此の市に祭られてゐることが政治的にも面白からぬといふ理由から之を國外に放逐せんとした。そしてそのことの可否をデルプオイの神託に問ふたがピウテイアの答へは、クレステネスが石もて撲殺せらるべき人間であるに對し、アドラストスはシキウオンの王であり、かくの如きは以ての外の事であるといふのであつた。彼はそこで一策を案じ人をテバイのポイオテイア人に派し、メラニツポスを迎へてシキウオンの祭神となさんとした。蓋しメラニツポスはアドラストスの兄弟と義子とを噓した英雄であり、アドラストスにとつて不倶戴天の仇敵であつたからしてである。クレステネスはかくして彼のために聖殿を設け、アドラストスから生贄や祭祀を剝奪して之をメラニツポスに與へた。またアドラストスの爲に捧げられた悲劇歌舞をデイオニウソスのそれに戻してシキウオンの祭神をすつかり變更してしまつたといふのである。この話は都市の祭神がその市の政治に對して如何に大なる壓力をもつてゐたかを物語るものとして十分であるであらう。クレステネスはシキウオンの市を治めるために先づアルゴス人たるアドラストスの靈を追放することから始めねばならなかつた。アドラストスは生ける人ではなかつたが、生ける人にもましてシキウオン人の心を捕へてゐたのである。

都市はそれ／＼の建設者をもち、守護神をもつてゐる。恰も家族が夫々の竈神をもち氏族がそれ／＼の氏神を有するやうに、都市には *Prytaneum* があつて神人を祭るのを常としてゐた。この神人は市民の祖先であることが多いがまた時として外から移入せられた場合もある。最も必要なことはそれが都市の神として常に之を守護するといふことである。*Eurystheus* はアルゴス人であるがその死せんとするや一余をアツテカに葬つてくれ、さうすればその國のため賓客として常に之を護らう」といふことといふ理由からアテナイに祭らるゝことになつた (*Euripides: Heracl. 1032*)。都市はこれらの神々にその守護を祈つた、危急の際はこの神々によびかけ、勝利のときは感謝せられたが敗戦にはそ

の義務を果さなかつたものとして祭壇は壊され、聖所に投石せられることさへあつた。都市が征服せられたときはその神々も捕へられ、神が去つたとき既に見放された都市として降服に甘んじたといふ。戦ひのとき神々も亦市民と共に戦場に出た。マラトンの戦にテセウスが参加して、アテナイのために眼ざましい働きをしたといふ傳説は有名である。ヘロドトスの傳ふるところによればアテナイ人がアイギナ人を討伐せんとしたとき、神託によつて先づアイギナの守護神アイアコス(Aiacos)の神殿をアテナイに設け、三十年間之を祭つて神意が漸く自己に移つたことを見届けた上で討伐に着手するがよいと考へたといふことである(Herod. V. 89)。また國際的な條約もこの神に密接なる關係をもつてゐたことは次の例によつても知られるであらう。エビダウロスはもと礎石不毛の地であつたが神託によりアテナイの橄欖樹を以て作つたダミアとアウクセシアの神像を祭ることによつて收穫を擧げ得るやうになつた。さうしてその理由からエビダウロス人は毎年アテナ、ポリアスに獻物を捧げることゝ定められたが後にそれを履行しないやうになつたのでアテナイ人が之を責めると、件の神像がアイギナ人によつて盜まれたからもはや獻物をする義務がないと答へたといふのである(Herodot. V. 82—84)。

以上、我々が多く都市の神々について語つたのは、それによつて都市のそれ々なる性格を理解せんがためであつた。都市にはそれ々なる守護神がある。それらが都市に祭られるやうになつた理由や事情が如何にもせよ祭られたる神々はその都市にそれ々なる性格を與へ、その特色を規定した。都市の神はその都市にイデオスなる神々であり、決して他の都市にも祭られ得る神ではあり得なかつた。都市はその神を失はんことを恐れて凡ゆる犠牲をささげ時にはその逃亡を防ぐために神像を縛し、隠匿さへもした。神々は市民の祖先であるのみでなく常にその守護神であり、之を失ふことは都市の喪失そのものであるに外ならなかつた。要するに都市はその神々によつて表徴せられてゐ

る、如何なる神を祭るかは如何なる都市であるかを示すといつてよい、都市のそれなる性格はその祭るところの神々によつて指示せられてゐるのである。

アテナイの都市にはテセウスを祭るテセイオンがあつた。そしてこの神殿が特に貧しき人々や不幸なる人々の避難所であつたことは有名である。そこからしてアテナイの建設者テセウスが特に貧しき人々の友であり、民主主義の創始者である如く考へられるのが常である。尤もテセウスがプロレタリアの友であつたからして、テセイオンがかくの如き *Asylum* となつたか又は、逆にテセイオンがかういふ場所であつたからしてテセウスが民主的性格の持主であるかの如く考へられるやうになつたかは我々の問題ではない。たゞかくの如き人をアテナイの都市神としてそこに祭られたといふことが重要なのである。アテナイ人は一般にテセウスの政治をデモクラシーに結びつけて考へることを好んだやうである。イソクラテスも民主政治の新しい形態が打立てられたのは、テセウスを以て最初とするのべてゐる (*Panathenais* 129)。僭主に對する烈しい呪咀と法治國家についての讚美の言葉とがエウリピデスによつて熱心に陳べられたのもテセウスの口を藉つてであつた (*Euripides: Supplises* 429)。テセウスが建國の初め、法權の擁護と國軍の司令とを除いて自餘の萬機は悉く人民の手に委ねることの約束を以てしたことは前に述べられた。テセウスはアテナイ人の祖先ではないが、アテナイ人の最もよき守護者たることを以て自任したことは明かである。アテナイ人がかくの如き人を守護神としたことは、アテナイの國家をして最初から民主的たらしむる理由となつたといへぬであらうか。ペルシアが専制政治の代表者であるに對して、アテナイが民主國家を標榜したのも既に建國の初めに溯ることが出来る。アテナイの王政は *Kodros* の時に既に終つたといはれる。彼がドリリア人の侵入に際し、國難に殉じてより王の名は廢せられ、爾後アルコン職がおかれた。コドロスの孫アカストスのときに九人のアルコンが任命せら

れ、彼と相並んで政務を行ふに至つて王權は全く地に墜ちた。Basileus の名は依然として存続したが、それは神に仕へる聖職としてしか意味をもたぬやうになつた。ドラコンやソロンの改革をへて民主的傾向は愈々顯著になつたが、五六〇年ペイストラトスの僭位によつてアテナイは獨裁政治に逆戻りしたかに見えたが、アリストテレスも明記してゐるやうに、彼がその國を治むるや、行ふところは tyrannikos であるよりもむしろ Politikos であつた (Arist. Athen. Polit. chap. 14, 16)。即ち他の一切の點に於て博愛且つ温和であり、過失を犯したものに對しても寛容であつた。また生計の立ちかねる者には仕事に對する金を豫め貸し與へ、百姓として生活が當み続けらるゝやうにさへした。これには二つの理由がある。(一) 人々を市に徒らに在留せしめず、村落をなして散在せしめ、(二) 人々が過不足なき生活の資を得て、自家の業に従ひ、以て公の事を考慮する欲望と閑暇とを持たしめなためであつた。第二の理由に至つては明かに民主主義と相容れないものであるが、その理由はとにかく實際に於て彼の政治が常に平和を旨とし、民衆の幸福を志してゐたことは、彼の時代がクロソスの黄金時代に擬せられたことによつても知られるであらう。ペイストラトスは僭主になつてから三十三年生存し、その中十年餘は亡命して居たが政權を維持すること二十年に及んだことは、假令彼の權謀術策によるとはいへ、可なりに民心をつなぐものがあつたからしてであるといはねばなるまい。彼は或とき地方に出て、まるで石ばかりの地を掘返してゐる男を見て、「その土地から何か出るのか」と尋ねた。その男の言ふ「苦しみと惱みだ、ペイストラトスも亦これらの苦惱の十分の一を負ふべきだ」と、この男は彼が誰れなるかを知らずして答へたのであるが、ペイストラトスははこの率直と勤勉とを嘉してこの男に租税を免じてやつたとらふ (Arist. Ath. Polit. Chap. 16)。是等のことについて考へられるのは彼が著しく民主的、且つ博愛的であつたといふことである。勿論これらのことは却つて彼の權謀術策から出たものであるともいへるが、少くとも表面的

には彼は萬事法律に従つて處理するのが常であつて、何一つとして自分自らの特權を主張しようとしなかつた。嘗て殺人の訴へによりアレオパゴスに召喚されたが、その時彼は辯護しようとして自ら出頭したので、訴へた者は恐れて棄權したといふ事が傳へられてゐる。これらのアリストテレスの記事によつても、僭主(τυραννος)が必ずしも後世理解されたやうに極端なる獨裁者乃至は暴君を意味してゐなかつたことがわかるであらう。ツエラーもいふやうに、それは *εβρος* 又は *εοβροτος* と相並んで單に有力者を、または支配者を意味したのであり、前五世紀頃の詩人達に於ては王者に對してのみでなく、神々について、むしろ尊敬すべき名として用ひられてゐたのである。イソクラテスの時代に於てもそれは *Basileus* の意に用ひられ、決して悪しき暴力者を必ずしも指してゐなかつた(Zeller: Über den Begriff der Tyrannis bei den Griechen. 參照)。

のみならずテイラニスの勃興を自ら、一種のデモクラシイを暗示してゐたといふべきである。何故なら彼等は名門の出であることが多かつたが、彼等の政權を握つたのは決してその血統や門地の故ではなく、却つて自己の力量と才能によつてであつた。彼等の或る者は賢人として稱へられた。彼等がデマゴグと名づられるのも、文字通りにデモスを導く人であり、民衆に地盤をもつ人々であつたからしてである。都市の勃興はこの僭主に負ふところが多大であつた。スキウオンの Orthagoras やコリントスの Cypselus 及びその子の Perandros などは殊に有名である。ペリアンドロスは賢人の一人に數へられる人であるが、この人の性格をあらはすものとして、ヘロドトスは次の如き話を傳へてゐる。彼はかつて政治の要諦を問ふべく使をミレトスの僭主トランプウロスに送つたところ、トランプウロスはこの使者を郊外の穀物畑につれて行つて穗のうち他より突出してゐるものを盡く剪り取り投捨てたのみで一言の忠告をも與へなかつた。使者はコリントスにかへり目撃したことを報告するとペリアンドロスは我が意を得たものと

して、少しでも傑出した人々を追放し、または誅戮せんとしたといふのである (Herod. V. 92)。この話を見ても僭主が何を志し、何をなさんとしたか、明かであらう。彼等にとつては平等は必ずしも自由と同一ではなかつた。凡ての人の平等はデモクラシイの原理であるが、それによつて却つて自己の優位を保たうとするのはテイラニスの精神である。僭主が有能な人々であるだけ、これだけまたかゝる邪道に陥り易いことは争はれない。都市は有能なる僭主を得て勃興することが多かつたが、またそれだけテイラニスに暴威を逞うせしむる餘弊を醸した。シラクサに於けるディオニシウス一世の如きは即ちそれであらう。彼は一日市民が蛇蝎視する一悪漢を褒めて恩賞を與へた。左右之を咎めるや平然と「何、吾輩よりもより多く憎まる奴がほしいのだ」と答へたといふ。しかしアテナイに於ける僭主が決してかかるものではなかつたことは、上記のペイストラトスの例によつても證せられるであらう。アテナイの祖先傳來の法即 *Thesmia* は常に次の如く教へた。若し何人かが僭主たらんとして立つならば、或はこの僭主政治の設立に参加するならば、當人及びその氏族ともに市民たる名譽を喪ふべしと。アリストテレスも種々なる理由 (一、それは市民の間に不信を蒔きちらす、二、それは市民の權力を奪ふ、三、それは市民を卑屈ならしめる、等々) をあげて、僭主政治を痛撃してゐる (Polit. V. II. 1311a)。アテナイの都市國家的性格はどこまでもデモクラシイであつたことは認められてよいであらう。さうしてかゝる性格から作り上げられたものがテセウスの傳説であり、かくの如き立場の上に打建てられたものがテセイオンの神殿であつたのである。

オストラキスマスの制度はクレイステネスの時代に制定せられたといはれるが、この投票法は既にテセウスの時に定められ、彼自らがその犠牲者となつたと傳へられる (Eusebius II. 50) とところを見てもテセウスがアテナイの建設者として如何なる性格に於てあつたかが明かであるべきである。何となればこの制度の目的はエブホロスやテオポ

ンボスの言ふやうに特に優れたるものを、または群を抜けるものを追放し、就中僻主的なるものを排除するところにあつたからしてである。アリストテレスによれば、それはアルゴスにも行はれたやうであるが(Arist.: *Politikos* 1302b)殊にアテナイに於て有名な制度であつた。正確なる起源は不明であるが、四八八年にヒツパルコスが最初の犠牲となつたことだけは確であるやうである。

クレイステネスはアテナイに於けるデモクラシーの完成者であるといはれるが、其の意味は従來四つの部族があつたのを改めて十部族に分ち、一層多數の人々を政治に参加せしめんがためであつた。この場合、同じ部族といふ語が用ゐられてゐるが、四の部族はイオンの四子に因んで名づけられ、それは血族的團體であつたが、クレイステネスの改革によつて作られたる十の部族はむしろ政治的團體を即ち *Demos* を意味してゐた。デモスは純然たる政治的區別であつて、アリストテレスも明記してゐるやうに(*Polit.* 1275b)クレイステネスはこの中に外人及び奴隸等をも登録したのである。従來アテナイの政治に参加し得る人はアテナイの市民に限られ、市民は正當なる市民権を有する両親から生れたものに限られてゐたのであるが、こゝに到つて外人も解放されたる奴隸とデモスの一員として政治に參與し得るやうになつた。いはゞ氏族による區別が一旦はかき亂され混淆せられ、改めて他の原理による區分が打立てられたのである。それ故にクレイステネスの改革は單に四の部族を十の部族に増加したといふことではない、それは量の問題ではなく質の改革である。デモクラシーとはかくの如きデモスを單位とする新しい政治形態であつたことは周知の如くであらう。

ギリシアに於てはクレイステネス以前にも之に類する區別がないわけではなかつた。Dittenberger (*Hermes* Bd. 20) *Toepfer* (*Altische Genealogie*)によつて強調せられたやうに、アティカの氏族團には二つのグループが區別せられねばならぬ。一は血族的(*Patronymen*)なるものであつて、エレウシスの *Eumipiadae*、アテナイ市の *Eleobontadae*

及び Eupatridai、アテイツカの Alameonidai 等々であつて大多數の氏族が之に屬してゐる。そしてこれらは明瞭なる祖先をもち、その血によつてつながれ、その名に於て結ばれてゐる。例へばエウパトリダイはオレステスを祖先とするが、それはよき父(Eupatria)から出た名門を意味するのみでなく、オレステスが父のために不倫の母を殺したことにその名を誇つてゐるのである。これらは凡て祖先を有し、それを保護神として作られたる血縁的團體である。これに反し第二の氏族團はいはゞ地縁的なる團體であつて、例へば Kephisiei が Kepnisois の河の近くに、Salaminiotai がサラミスに發祥したものの如きがそれである。クレイステネスのデモスはこの第二の氏族團に近いものであるが、しかし、原理的には同じものではなかつた。それは政治的なる身分であつて、血縁的又は地縁的なるものではなかつた。Phratia はクレイステネスに到つて Demos によつて置きかへられ、所謂デモクラシイが完成したのである。しかし、この後に於てもフラトリアは血縁を中心とするもの (Oikotylaktes) の外に、宗教によつて結ばれたるもの (Oikotides) として依然存続してゐたことは事實である。さうして彼等はそれらの祖先と祖先崇拜とをもつて、恰も國家が各々の特性をもつやうに、それらの家系を特色づけてゐた。彼等は國家の神々を祭ると同時にそれらなる氏族の神を守りつゞけてゐた。Eleouboutadai が、アテナ、ポリアスやポセイドン、エレヒテウスを祭る外に Bures を祭り、Eumolpidai や Kerukes がエレウシスの神々の外に自己の氏族の英雄を祭つたやうに。

都市がその祖神を祭り、その守護を仰がうとしたことはかなり後代に到るまで續けられたやうである。テセウスの骨が Skyros からアテナイに移されたのは前四七五年の頃であり、Peleus の骨がトロイからアムピイポリスに持歸へられたのは四三七年であると傳へられてゐる。アテナイに於てテセイオンの建立せられたのはキモンの時代であり彼がスキロスを遠征したのもテセウスの骨を求めためであつたと傳へられる。テセウス傳説が完成せられたのも此

の時代に於てであることを思へば、如何に祖神が都市生活の中心をなしてゐたかを想見するに難くはないであらう。

六

ギリシアに於ける諸都市がそれ々に特有なる性格をもち、それが各々の國家形態を規定することを實證せんが爲めに、上に主としてアテナイの都市國家について述べたのであるが、之に對比するものとして常に論ぜらるゝのはスパルタの國家である。古來國家の制度として最も特色あり、古代に於ては勿論、廣く人類生活の模範と仰がるゝスパルタの國家は、如何なる制度と形態をもつてゐたのであるか。この問題に當つて先づディキンスが提出したやうに、(Dickins; The growth of Spartan policy. The journal of hellenic Studies vol. 32.)スパルタの發展はギリシアの諸國家の間にあつて全く例外的であり、ユニークなものであつたか否か、問はれねばならぬであらう。さうしてディキンスと共に少くとも前五五〇年頃迄はスパルタの發展には何等の異色もなく、他の諸國家と略々同様であつたと結論しなければならぬであらう。しかし、それにも拘らずスパルタには既にその建國の昔(ディキンスはそれを前八〇〇年頃迄溯らせてゐる)に於て一つの特色をもつてゐた。それは即ち二人の王の制度である。この制度がドーリア人古傳のものであつたか、またはこの人種がラコニアに定住したときに初めて齎らされたものであるか、また第二の王は一人の王の獨裁を制限するために設けられたものであるか否か。力を二人の支配者に分割することは純一なる原始社會に於て似あはしからぬことであり、遊牧的な、武力を頼む侵略社會に於ては實際に不可能でさへあつたとも考へられる。ヘロドトスの傳ふるところによれば(Hdt. VI. 52)アリストデモス王の子に Eurystates と Prokles といふ雙生兒があり、互に酷似してゐたので孰れを長子として王位に即かしむべきかに迷つた。生みの母なるアルゲイアすら之

を識別し得なかつたので、デルフォイの神託に伺つたところが、ピウテイアは二人の子供を共に王として遇し、そして年長の方をより以上に尊べと命じた。しかし孰れが年長であるかは依然として不明であつたので或るメツセニア人の案に従つてアルゲイアを監視せしめ、彼女が食事や沐浴を常に先きにした方を長子と定めたといふ、彼等は成人するや、兄弟であつたにも拘らず存命中は常に不和であり、彼等の子孫も同様に仲が悪かつたといふのである。この傳説が眞であるとするならば、スパルタに二王が君臨したのは決してドーリア人の古き習慣ではなく、(ドーリアの他の社會にはこのことは見出されない)たゞアリストデモスの子に雙生児が生れたといふ偶然なる理由によつたのであるといはなければならぬ。しかし、これは傳説であつて、ヘロドトスも之をたゞスパルタ人のみが語り傳へてゐる話であると斷つてゐる(VI. 53)。多くの歴史家が論ずるやうに、この傳説は恐らくドーリアの二つの種族が融合してラコニアに定住するやうになつた Synoecism を意味するものであつたであらう。その起源が如何にもせよ、この制度はたしかにスパルタに特有なものであり、スパルタ國の發展に少からぬ陰影を引いてゐることは確かであるといはねばならぬ。初期の二王はその活動に於てもそれ／＼範域を別にしておいた。Agis はアエオリスに植民地を作つたが Souda はヘロス族を征服し Cleitor と戦つた。また Echestratus は Gynuria を征討しつゝあつたと云ふ、Eurypon はインテイネアを攻略してゐる。次の時代に Labotas と Pytanis とが共にアルゴズと戦つたが、明かに別個の行動をとつたと傳へられてゐる。しかし、その後に通じては二王が協同して作戰するやうになつたことは Charilaus と Archelaus との Megys 市の攻略に於て、又はメツセニア戦争に於て見らるゝ事實であつたといふ。ヘロドトスによれば(VI. 54)スパルタに於てはゼエウスの祭祀にも二つあり(Zeus Lakedaimon と Zeus ouranios)。(バツサニアスの記載によれば、(III. 12-14) Euryponidae の墓はアブエタイド路の先きにあつたが、Agiad 王族の墓は Theomelida の中にあつた。

この地域は特に Agiadai と呼ばれたといふ。アギアダイの領地は市の北西、アクロポリスに近く、エウリポンテイダの封域は市の南東エウロタス河と新スパルタの小山との間にあつた。

スパルタがラコニアに勢力を得たのは Charilaus と Archelaus の二王の時代からであり、それ以前の諸士については史實の傳はるものはない。さうしてスパルタに Synoikia の起つたのは恐らくこの時代に於てであり、國力の急激なる増加によつて都市が一つの國家にまで發展したのも大凡そ八〇〇年頃であつたと推せられる。そこには建設と共に多くの改革も行はれ、ヘロドトスの所謂 *Kakonomia* の時代から *Eunomia* の時代が將來さるゝに到つたのもこの頃であつたであらう。さうして何れの國に於てもさうであつたやうに、スパルタの建國も急激なる社會制度の變革によつて齎らされ、普通にそれはリュクルゴスの名に結びつけられるのであるが、しかしデイキンスも論じたやうに彼はこの *synoecism* と何の關係もなく、恐らくはそれよりも一世紀程後の人であり、この制度の創設者であるよりもむしろ、この制度によつて醸された種々なる鬭争の調停者であるにすぎなかつたと見るのが史實に近いであらう。ヘロドトス以前に彼の名は知られなかつた。テイルタイオスはスパルタの制度について語つてゐるが、彼自らについては何事も傳へてはゐない。リュクルゴスの存在を直接に證明するものとしてオルユニピアの圓板にイブヒトスと共に彼の名が記されて居り、アリストテレスも之を證明してゐるといふプルタルクスの記事が (Plutarchus, Luk. c.) 屢々引かれるのであるが、スパルタ人は最初の中はオルウンピアの競技には參加しなかつた。第四から第九オリウンピアに勝利を得たものはむしろメツセニア人であつて、スパルタ人が初めてそこに登場したのはやつと第十五オルウンピアに於てであり、前七二〇年の頃であつた。それは恰も第一メツセニア戦役の終り方、メツセニアをアルカデア及びアルゴスから切斷するたるにスパルタ軍が *Príphtian* を占領した時に當つてゐる。恐らくリュクルゴスはこ

これらの間に處して働いた有能なる政治家の一人であつただらうが、しかし、スパルタの制度は決して彼によつて創作されたものではなく *Spouda* と共にもつと以前に既にあつたものであらう。我々にとつて重要なものは彼が實在の人であつたか否かといふことではなく、彼が例へばアテナイに於けるテセウスの如く建國の祖としてあつたかどうかといふ點にある。彼は恐らく實在の人であり、またデルプホイの神託に語られた如く、人か神かとあがめらるゝまでに有徳の士であつたことは慥かであらう。しかし、それにも拘らずテセウスの如くスパルタの建設者であつたと斷定することはできない。そのことは彼の名に歸せられる三つの *Reia* が最も雄辯に語つてゐる。プルタルコスによれば第一のレトラは、法律は成文的に明記せらるべきでなく、むしろ人々の胸から胸臆に傳へらるべきものである。第二に奢侈を禁じ浪費を戒告し、第三に同一の敵を相手として戦ふこと屢々なる勿れ、また久しきに亙るなかれ、それは敵をして防戦に慣れ、戦ひに巧なる豪敵たらしむるに役立つからといふのである。これらのレトラからスパルタにとつて特異なる何ものを我々は見出し得るであらうか。七二〇—七〇〇年がレトラのデイトであると認められるならばそれはたしかにリウクルゴスの時代であるが、しかし、内容的に見て一種の處生訓にすぎぬ。スパルタの制度を特に際立たしめ、それを特定する何ものも見出し得ぬのである。この國にとつて特異なる制度はむしろ建國の昔に初まつた二王の支配制であり、そこにスパルタの都市國家的なる性格が見出され得ねばならぬ。しかし、二王の制度は何を我々に語るものであるであらうか。この點を明かにするために少しく神話の世界に立入つて、スパルタ人の祖神と崇めらるゝ英雄の事蹟を探つて見よう。

ギリシアに於て雙生兒の表はれる神話は *Tyndaros* の子孫といはれるテイタリデンに於いてあり、それが殊にラコニアの地 *Therapie* に關係をもつてゐることは我々の注意を引く點であらう。この神はもと地下の神であり、その

シムボルとして二匹の蛇が用ひられ、早くからヅエウスに結びつけられて *Dioscuri* (*Δίος κούροι*) 即ち神の子等と名づけられた。そして一人は目申オリウムボスに、一人はテラプネの地下に交互に居住すべく定められ、遂にスパルタに於て *Zeus Ambulios* と共に祭られ、國家の神となつたのである。雙生神の信仰はしかし單にラコニアの地に限られず、ポイオチアでは *Amphion* 及び *Zethos* の二神としてアルゴスでは *Dipoin* と *Skyllis* として、メッセニアでは *Idas* と *Lynkeus* の二神として祭られぬのを見ると、かなりに廣く行互つた神話であると考へねばならぬ。殊にこれらの中にあつて有名なものは、*Kastor* と *polydeukes* とであつて、テラプネには共同の墓があるばかりでなくまた獨立した英雄としても祭られてゐた。カストルは一説にはヘラクレスの數々の偉業に道案内として働いた英雄であつたともいふ。ポリウデウケスはスパルタとテラプネとの間に流れる *Polydeukia* に因んだ名であつたであらう。これらの人々はラケダイモニアに於ては早くから國家的英雄として崇められ、それに相應しき數々の冒險や鬪争について語られてゐる。ポリウデウケスは拳闘家として有名であり、カストルは戰車競争の選手として著名であつた。彼等はアルゴ船の遠征に於ても重要な役割を演じてゐる。彼等はテセウスによつて誘惑された姉妹なるヘレーナをアプイドナイから救ふことに成功してゐる。殊に彼等は海上の風波から人々を救ふことに特技をもち、ロクリアの戰に於て顯著な功績を立てた。陸上に於て狩獵の神として崇められるのも同じ理由によつたのであらう。彼等はまた輝く星として表徴せられ、アイゴスポタミの戰ひにリサンドロスに乗艦の兩側に高く輝き、その勝利を導き、または祝ふ如くであつたと云ふ (*Plut. Lysandros* 12)。リサンドロスは戦利品の黄金を材料としてカストル及びポリウデウケスのために像を作つてデルポイに奉納したが、後にレウクトラの戰前に紛失したのはスパルタの大敗の前兆であつたといはれてゐる。彼等は遂に宵の明星と曉の明星とに擬せられ、人間の吉凶・禍福を司る神々として考へらるゝに到つ

た。神々の中に於てディオスクュロイほど人間に近く、人々の間にあつて親まれたものは稀れであらう。彼等は神々であると共に人間であり英雄でもあつた。彼等はオリウンポスの山上よりも、むしろ地上に、人々の間にあつて常に救済の神 (*Neotereus*) として立働いた。彼等は好んで人々の賓客として招かれる (ヘロドトスにはディオスクーロイを家へ迎へて款待したパイオスの人エウポリオンの話が見えてゐる、第六卷一二七) が故に、*Boetiana* とも呼ばれ、パウサニアも次の如き話をつたへてゐる (第三卷一六)。スパルタの神區に、もとはテイングレウスの子等によつて棲まはれてゐたが今はフォルミオンの住宅となつてゐる一軒の家があつた。或日のことディオスクーロイはキレネから來た旅人の姿にやつしてこの家に一夜の宿を乞ふたが、嘗て彼等の好んで住むた部屋は今フォルミオンの娘の室になつてゐたので他の部屋に宿ることとなつたところ、翌日娘もその持ちものも盡く消え失せ、部屋にはディオスクーロイの像と机とその上に香料とが殘されてゐたといふ。之等の話を見てもディオスクーロイが如何に人々の間にあり人々の友であり、多くの場合そのよき友であつたかを知ることができる。スパルタが二王によつて統治せられたといふことも何らかの意味に於てこの信仰に關係をもつてゐるといへないであらうか。勿論、ディオスクーロイの傳説はラコニアに限られたものでなく、アルゴスにもメッセイニアにもアテナイにもデロス (そこでは *Boi Hērtaioi* として祭られたといふ) に於てさへもあつたのであるが、しかし、その根源はスパルタに近きテラプネにあつたことは明かであり、彼等がテイングロスの子等として特徴づけられてゐたことも有名である。Tardanos は *Tevd'iosos* とも書かれ *tundere* と關係をもち、「破壊者」を意味するものとせられてゐる。ラコニアに侵入したドリリア人にとつてディオスクーロイが名祖と考へられたことも意味なしにはなかつたといはねばならぬであらう。殊にギリシアの神々の中で雙生神が語られることはめづらしい、スパルタの初代の王が雙生兒であつたからしてこの神々がそれに結びつけて

考へられたか、またはこの地の産土神が雙生神であつたからスパルタに二王の制度が立てられるやうになつたかとは不明であるとしても、この間に何らかの關係のあつたことは推知するに難くはないであらう。さうしてそれが如何なる起源からにもせよ、二人の王の支配がスパルタの國家に特殊なる性格を與へたことは、確かであるといはねばならぬ。スパルタでは假令エポオロスの制度がかなり早く、また久しきに亙つて存在してゐたとはいへ、國家の體制としては、大凡王國であることに變りがなかつた。テオポンボス王がこのエポオロスに多くの權利を認めたのも、それによつて民權の高揚を目圖したのではなく、却つて王權の存続を確保せんがためであつたことはブルタルクスの次の記事によつても明かであるであらう。王妃は一日テオポンボス王を責めて、君は王權をば祖先より受け繼ぎ給へるときより更に小さきものとして子孫に傳へ給ふやと言つたところ、王は答へて「否、朕は之を擴大こそすれ決して減小したのではない、何となればこれによつて王權はより長く續くべければ」といつたといふ (Plut.: Lyking)：王の權力は二人の王に分たれることによつて著しく穩當なるものとならざるを得なかつた。スパルタの諸王はその大權をよく制限したるが故に一般の嫉妬とそれに伴ふ危険から免れることを得て、アルゴスやメッセイニアの如く早くその一切を失ふに到らなかつたといはれる (Plut. op. cit.)。ヘロドトスによればスパルタ王の權限として定められたものは大凡次の如くであつた。彼等には第一にツエウス、ラケダイモンとツエウス・ウラニオスとに仕へる二の祭司職が與へられ、また彼等はその望むところの國に對して戰を宣し、それに對しては如何なるスパルタ人も阻止することが出来ない。若し反對すれば追放の刑に處せられる……平時に於ては市民が公の犠牲を行ふとき王は眞先にその饗宴の席に着き、他の客人に比して二倍の待遇が與へられる。また護民官を任命し、ピウタイアを選出する等の外、未婚の女子が父の遺産を相続すべく殘されたとき何人がその夫たるべきかを定め、人の子を養はんとするとき王の面前に於て之を聽許

する等々の事柄であるにすぎぬ (Herod. VI, 56)。王の逝去は市民の一般的なる服喪によつて哀悼せられ、時には前額を叩いて限りなく追悼がつゞけられるが、しかし、それもやがて形式的となり王に對する市民の尊敬はもはやホメロス時代の無際限なる *hymn* でなくむしろ彼等のそれらなる位置にふさはしい *tepa* であるにすぎなくなつた。 *tepa* 又は *tepa* はむしろ市民的なる尊敬に價するものであり、そこから *teponia* 即ち元老院といふ語が發生したことを見ても、それが如何なる種類の尊敬を意味するかは分明であらう。王といへどもその非行に對しては厳しく罰せられざるを得なかつた。例へばレウテュキデスがスパルタ人の將としてテツサリアに兵を進めたが、莫大な賄賂を受け、その陣屋で黄白の充満した籠を臂に敷いたまゝ、悪事が露顯し、司直の裁きを受けてスパルタから追放せられ、彼の家も打毀たれ、彼はテデアへ亡命して其の地で客死したと傳へられてゐる (Herod. VI, 72)。スパルタの諸王の中でも最も有名な Cleomenes さへも、デマラトスに奸策を弄したことが露顯したのでスパルタ人に對する恐怖からテツサリアに頼晦し、或はアルカディアに免れ、諸方を漂浪したのち再びスパルタに還つたが遂に發狂してスパルタ人に出會ふ毎に相對構はず笏をその顔へ擲げつけ、遂に自ら我身を裂いて卒したといふ (Herod. VI, 75)。これらの記事からして我々の受ける感じは王といふよりもむしろ比較的權威ある貴族に近いものであるであらう。スパルタはギリシア諸國の中にあつて僭主政治のかつて一度も行はれなかつた唯一の(或は少數の)國であつた。ツキユディデスもスパルタ人の誇るに足るべき要求は常に反僭主的であつた (*hai antiphrustoi*) ことであるといひ (Thuky. I, 18) くロドトスもコリントス人 *Societes* の口を藉つてテイラニスに對する彼等の態度を表白せしめてゐる (Herodot. V, 92)。曰く「スパルタ人よ、兎も角汝等が共和政治を打倒して僭主政治を諸都市に復活せしめようとするのは確かに天が地の下になり、地が天上の中空に懸り、人は海中に棲息し、魚が人の跡に住むことと同様になるであらう。人間

の如何なる不正も、如何なる殘虐も、それにすぎたるものはないのである。蓋し、汝等として國家が僭主に治められる事を良いと考へるならば、汝等は先づ自國に僭主を樹立し、然る後に他人のためにそれを立するやうに努力すべきである。然るに現に汝等自らは僭主の經驗はなく、且つスパルタにはかゝることが行はれないやうに最も巧みに用心してゐるのであるから、汝等は盟友に不當なる態度を以て臨んでゐる譯である。若し汝等が我々と同様に僭主についての經驗が有るならば、汝等はそれについて今より優つた意見を寄せるであらう。これによつて見てもスパルタ人は嘗て一度も僭主政治を経験しなかつたことが史實として明かにせられ、またスパルタはテイラスの如き獨裁的な權力を受け容れないほどに緩和せられた王政であつたことも知られるのである。それは王政であるよりもむしろ貴族政治に近いものであつた。王が二人であることは單に數の問題ではなく、同時にスパルタの政治形態を規定する重因となつた。王は獨裁君主ではなく、況んや僭主では到底あり得なかつた。王が Ephors の制度を立てたのはたゞこの延長にすぎない。兩者の關係は後に見る如く頗る複雑したものととなつたが、それにも拘らずテオポソス王の言明した如く、それは決して民權を擴張するデモクラティックな意圖に出たものではなく、飽くまでも王權の確立を意味するものであつた。スパルタではたゞ常に個人は國家の中であり、國家は個人の上にあつた、さうしてこのことに於ては國王といへどもその例外をなすことが出来なかつた。國王があつて國家があるのではなく、國家があつて國王が認められるのである。國王はたゞ國家の成員として特に優れたる權威を持つものにはすぎない。スパルタに於ては生れたる兒童が盡く兩親にはなく國家に屬すると考へられたやうに、王も王自身のためにはなく、國家のためのみ存在するものと考へられざるを得なかつた。かゝる國家に於て僭主政治——それは國家によるよりも個人による政治であつた——の行はれ得なかつた理由も餘りに著明であらう。かつてスパルタ人キロンがヒツボクラテスに、人

間は子なきにしかず、子ありとも之を養はざるに如かずと告げと傳へられるが(Herodot. I. 50)それはヒツボクラテスがアテナイの僭主ペイシストラトスの父であつたからしてあることを思へば、如何に僭主的なるものがスパルタの國家と相容れぬものであつたか分るであらう。しかし、その理由からしてスパルタの國家が民主的であつたとは言へない、こゝにも早くから元老院(Gerousia)や Apella や Ephoroi の制度があり、そしてそれらは一見アテナイに於ける Archon や Areopagos の制度と酷似してゐるやうであるが、しかし、スパルタではこれらの民意を代表する制度も決して人民のためにはなく、むしろ國家そのものゝために存してゐた。王が國家の一機關である如く、元老院も國會も盡く國家の構成要素であるに外ならなかつた。ゲルウシアのラコニアの方言は *Tegeaia* であるが、それはアルコンの如く支配者を意味するよりもむしろ年老いた經驗に富み、尊敬に價する人々を意味する。恰もアガメムノンに於けるネストルやオデイセウスの如く、王をたすけて國政を正しからしむる顧問官であり、スパルタのそれがホメロスの元老會の最もよき後繼者であつたといはれるのもこの理由に基くのである。Ephoroi は六十歳以上の監督官であるが、その數は五名に限られてゐた。之等の設置は一方からいへば王權に對する民權の擴大を意味するものであるが、しかし、クセノポンの傳へる如く王とエプオロイとの間には毎月誓約を新にして、王は専ら國法に則つて政治することを、エプオロイも國家の名に於てこの誓ひの守らるゝ限り、王政の搖ぎなきことを誓はねばならなかつた(Xen. Lak. pal. XV. 7)。王もエプオロイもそれ自らとして支配するのではなく、人民の唯一の支配者または命令者はノモスであり國法であるに外ならなかつた。デ馬拉トスが、クセルクセスに答へたやうに、スパルタ人は自由であるが何から何まで自由であるといふのではない、彼等の上には法といふ支配者が君臨し、彼等はペルシア人がクセルクセスを畏怖するよりも遙かより以上にそれを恐れしてゐるのである(Herod. VII. 104)。エプオロイの職務は監督官で

ある。しかし彼等は何を監督し、何を取締るのであつたか。彼等はヘローテン (Holothen) に對する警察權を有し、苟くも疑のある奴隸ほどしく殺戮したといはれる。ヘローテンの問題はスパルタの建國の初めから最後に至るまで重大なる社會の問題をなしてゐるが、しかしそれらは被征服者であり服従者であるから之等に對し絶對權を有することは怪しむに足らぬ。エポオロイの監督權はむしろ王に對して發動するとき人々は異様な感を抱かざるを得ないであらう。ペルシア戰爭のとき二人のエポオロイが常に王に側近してその行動を監督してゐたといふ。二人の王は既にべられたやうに多くの場合、和を缺いてゐたが、その間に争ひの生ずるとき仲裁者となるのは常にエポオロイであつた。ブルタルクスの傳へる所によれば、エポオロイの恒例行事に次の如きものすらあつた。即ち九年目毎に、エポロイは、雲も月も無き星明の夜を選び、靜肅に居並んで天空を凝視する、さうして偶々星の流れるのを見たときは彼等は即座に、國王が諸神に對して犯せる罪ありと宣告する。すると國王は後日デルポイ又はオリウムピアの神託によつて勘氣の解かるゝまで、直ちに一切の王權の行使を停止するのである (Plutarch, Pagan)。しかし之等の場合にもエポオロイは私意からではなく専ら天意によつて王の非行の改められんことを祈つたのであり、二人の王の争ひに於ても彼等は常に道理あるものゝ味方たらんと志したのである。エポオロイは權威あるものゝ如く命令したのではなく、ひたすらノモスの擁護者を以て任じ、その故にこそ王者をも裁斷し監督し得たのである。

スパルタの制度に於て最も民意的なるものは *Apella* であり、それは三十歳以上の正常なるスパルタ市民よりなり毎月満月の日に、エウラタス橋とクナイキオンとの間の廣場で行はれる民會であつた。テイリュタイオスの時代までそれは王によつて招集せられたが、五世紀頃にその權利はエポオロイに移つた。王は豫め元老會と協議せられた議案をそこに提出して、一般の評議に附するのであるが、假令民會の總意によつて決議せられたことでも正しからぬ決議は

之を實行する必要はなかつた。ホメロス時代に於てのやうに王は必ずしも民意に束縛せらるゝことなく、たゞノモスによつて支配せらるべきことを誇りとしたのである。

スパルタの制度に於て中心的位置を占むるものは二人の王と五人のエプオロイとである。その長き歴史はこれらの間の葛藤であり、また消長であつたと見ることもできよう。クレオメネス王はかつてそれに挑戦して次の如く論じた(Phit. Koorn.)。昔リユクルゴスによつて元老院が兩王に結びつけられて以來、この形式の政治が永く続き、他に何等の官職をも要しなかつた。然るにその後メッセイナ人との長き戦争の間、兩王は専ら軍の統帥に當らねばならなくなり、訟を聴き罪を裁く邊がなくなつたから、彼等は信任する友人の若干を選び、彼等に代つて市民の訴訟を裁斷することを委任した。之等の者は *ἐπιστάται* と稱せられ、當初は兩王に對して臣下として振舞つて居たが其の後、彼等は次第に權力を私有して特別な官職を設定するに至つたのである。それが眞實なることの一つの證據は、今も尙兩王が遵守してゐる舊慣によつても知られよう。即ちエプオロイが王を召喚する場合、王は第一次及び第二次の召喚に對して出廳することを拒み、第三次の召喚によつて初めて腰を上げてエプオロス廳に赴くのである。エプオロス官を高き權利にまで掲げた人は *Archeus* であるが彼はこの制度の設立から多くの歳月を経た時代の人であつた。それ故にエプオロイがその本來の職責を守る限り、強いて波瀾を起さんよりは忍んで有るに任す方がよい。しかし彼等が、成り上りの附焼双的權力に分を忘れて或は國王の辯明に耳を假すことなく、或は國王に對し反逆を擅にし、甚だしきは弑逆をも敢へてするに到つては斷じて之を容すことが出来ない。——クレオメネス二世の時代に國王とエプオロイとの抗争は絶頂に達した。それは前二二六一年—二二二年の頃であり、彼のエデプトに於ける横死とともにスパルタはもはや王をもつことを止めたのであるが、我々は五百年の長きに亙つてスパルタが國家として特色ある體制を持ち続け

たことを見るのは何によるのであらうか。それは王とエプオロスとからなる所謂貴族政治に因してゐる。王が二人であることは既に専制君主たることを止めてエプオロイに近かつたことを示すが、それにも拘らず民主政治の興らなかつたのはエプオロイが王を凌ぐまでの權勢をもつてゐたからしてある。彼等の間に抗争を醸すことは政治の常態であるが、王とエプオロイとが共に國家の中に没入する限り、スパルタは法治國の模範的なるものであり得たのである。彼等が盡く法の下に立ちそれを擁護し、それに則つて治世すべきことに凡てが懸けられてゐた。Rehta は最もよくこの精神を表現するものとして法の前に法ならざる法として支配してゐたのである。法が成文を旨とせざることも彼等にとつてそれが餘りに生々として胸臆に刻みつけられてゐたからしてある。都市が城壁によつて圍まれる如く國家はノモスによつて守られねばならぬといふことが、スパルタに於ての如く眞理を持つたところは何處にもなかつた。否都市を圍む城壁さへも不要であると考へられたのはスパルタに於てある。リウクルゴスの傳説が主としてこのノモスの確立に結びつけて語られてゐるのも理由なしではないといはねばならぬ。スパルタの國制は決して彼によつて創設せられたのではないとしてもそれに結びつけられた彼の名は國王以上のものであり、神に近きものでさへあつた。三世紀に入つてアギス王やクレオメネス王の下に行はれた治世は凡てリュクルゴス時代への復歸を理想としてゐた。當時墮落せる人々は彼の名を恐ること恰も逃亡せる奴隸が引戻されて舊主の名をさくが如くであつたと

54(Plut. Agis)。(未完)